

yuko tsushima

津島佑子

真昼

真昼へ



真昼へ
#226

© Yūko Tsuchida 1988, Printed in Japan

印刷——1988年4月15日

発行——1988年4月20日

定価——1100円

著者——津島佑子(つしまゆうこ)

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社 新潮社

発行地——162 東京都新宿区矢来町71

電話——業務部(03)266-5111 編集部(03)266-5411

振替——東京4-808

印刷所——東洋印刷株式会社

製本所——大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替いたします。

ISBN4-10-351002-1 C0093

泣き声

5

春夜

61

真昼へ

119

装
幀
——
菊地信義

真昼へ

泣き声

夜の十時に近い時刻になっていた。

電話が鳴った。受話器を取り上げると、母のうろたえて、甲高くなった声が聞えてきた。

……あの子がいないの。いつの間にか外に出てしまつて、まだ帰つてこないのよ。今まで待ち続けていたんだけど、もうこんな時間になつてしまつて。ねえ、どうしよう。どうしたらいいんだろう。どこまで行つてしまつたんだろう。おそろしいことが起こっているんじゃないだろうか。そんな気がしてしょうがないの。ああ、どうしたら……。

耐えきれなくなつたのか、母は細い声で泣きだした。

……しつかりして、大丈夫に決まっているんだから。すぐにひよつこり戻つてくるわよ。

母の取り乱しように驚いて、よく考えもせず、私はおざなりな言葉を思わず口にしていた。

……そうだろうか。

……ええ、もうすぐ必ず。心配している時には、悪いことは起こらないものよ。だから、大丈夫。

……そういうものだろうか。

母は泣き止み、ぶつぶつ呟いた。

……ええ、本当に。安心して待ってればいいのよ。時間だって、まだそんなに遅いわけじゃないわ。

うん、うん、と母は小さな声を返し、それじゃ、と素気なく電話を切ってしまった。まだ相手の言葉も終わらぬうちに、慌しく電話を切ってしまうのは、日頃からの母の癖だった。

受話器を下ろしながら、私は暗澹とした気持ちに襲われた。七十なかばになる母は私の兄と二人きりで、世間との接触も一切断ち、人知れず暮らしていた。そんな母だったことを思い起こし、だからこそ母は今までの長い間、それなりに充たされていたことも、改めて感じさせられた。危うい、静かな充実だった。それが突然、同じ静けさのままひっそりと突き破られてしまったらしい。

電話で私は思わず母を力づけるようなことを言ってしまったが、兄がいなくなってしまうからの時間の長さを思うと、どうしても最悪の事態を兄の身の上を考えずにはいられなかった。車に轢き殺された兄の体。高い所から転がり落ちた兄の体。冷たい水のなかの兄の体。その冷たさが直接、私の体に伝わってきた。どうにかして、兄が無事に戻る可能性を見つけたかった。しかし、絶望感は濃くなるばかりだった。兄はダウン症の子どもで、いったん一人で外に出ると、道を辿り続けることに熱中してしまい、道が続く限り、家に戻るということを決して思いつかないのだった。

なにはともあれ、今すぐに母のもとへ行つてやらなければならないのだろう。母もそのことを言いたかつたのではないか、と思えた。どんな夜よりもいばんつらいこの夜を、母に一人きりで過ごさせてはいけない。朝になるまでには、母は兄の死を知らされることになる。早く、母の家へ行かなければ。

しかし、私は臆病で卑怯な気持ちを振り捨てることができないまま、自分の住まいから動かずに夜を過ごしてしまった。兄の死を見届けることが、そして母の絶望に巻きこまれることが怖ろしかった。母からの電話はもう掛かつてこなかった。なにも言つてこないのだから、わざわざ行かなくてもいいのだ、と考へてもみた。が、時間が経つにつれて、その母の沈黙に怯えずにいられなくなつた。母の絶望の深さが感じられた。兄を今頃になつて見失うことになつてしまつた母の苦しみ。

それでも、私は母のもとへ行かなかつた。もう遅いのだ、と自分の住まいで震え続けていた。朝になるにつれて、外を走る車の音が賑やかになつた。母からはまだ電話が掛かつてこない。私の方から母に電話を掛けるなど、今さら到底、できることではなかつた。

三十年近くも前、十五歳になつていた私の兄は、心臓の発作で急死した。個人病院に入院した翌日のことだつた。兄が入院したのは、私が学校に行つていた間で、夕方、家に戻ると、もう兄はいなくなつていた。一度、病院から戻つてきて、また身のまわりの品を持つて出かけようとす

る母に、私は一緒に行きたいとせがんだ。きょうはどうせ少ししか会えないから、あした、学校の帰りに寄ってごらん、その方がゆつくり会えるでしょう、と母に言われ、そうすることにした。兄の入院という珍しい事態に、胸を弾ませていた。兄と言っても、私の弟のような存在だった。遠慮なく兄の病室で、お菓子を食べたり、冗談を言い合ったりしてくつろぐことを楽しみにしていた。しかし、翌日、学校の帰りに病院に行くと、兄の部屋は空になっていて、隣りの病室の付き添いの人から、すでに兄は家に戻っている、と聞かされた。冷たい体になって。

その時ほど、家に戻るのを苦痛に感じたことはなかった。家とは眼と鼻の先にある病院だったから、どんなに遅く歩いたとしても十五分もかからなかったに違いない。中学の一年生だった私は、事実を胸の底で認めながらも、理由にならない理由を次々に考えだしては兄の無事にしがみついていた。お亡くなりになったとは言われたが、死んだとは言われなかった、とか、母に言われていた兄の病室の番号を間違つて憶えていたのかもしれない、とか。晴れ晴れとした、とても良い天気の後だったことを憶えている。

家に帰り着いても、なかに入る勇氣が出ず勝手口の前をうろうろしていた。急に勝手口のガラス戸が開き、なかから人が出てきた。だいたい前に家にいた手伝いの女性だった。こんな人までが家に来ている、と思つた時、私は兄の無事を諦めた。それなのに、意固地な気持は捨てられず、その人に私は、さもなにも知らぬ氣に笑いかけ、あら、どうしたの、と問いかけていた。まあ、なんにも知らないの、まあ、そうなの、あのねえ、と相手はうろたえながら言いかけたが、言葉

が出ず声を放って泣きだした。私はその人を置いて、一人で家のなかに入った。二人の伯母がいて、私の顔を見るとこの人たちも泣きだした。

母は隣室に、兄と共にいた。その部屋に入りたくなかった。しかし、二人の伯母に背を押され、逃げだすこともできずに、母と兄のいる部屋に入った。兄の顔を、伯母に言われ渋々見届けた。兄らしくない、いやな色になっていた。伯母がその頬を撫でながら、泣き崩れ、母も泣きだした。あんな気味の悪いものによく触われる、と私は呆れていた。

きょう、お見舞いに行く約束をしてあったんだって、と伯母の一人に聞かれたので、私は頷いた。それをこの子は楽しみにしていてねえ、まだ来ないか、まだ来ないかって、最後に呟いた言葉も、あなたの名前だったんだよ、本当にあんたが好きだったんだねえ。

伯母はそう言いながら、また泣きだした。私は無然として、涙ぐみもせずにその場に坐り続けていた。だったら、どうしてすぐに私に知らせてくれなかったのか。兄の様子がおかしくなった時すぐに呼んでくれていれば、最期に間に合って、兄を安心させることができたかもしれないじゃないか。私に会えなかったなんて、兄が気の毒じゃないか。私は腹を立てていた。しかし、誰にも言えることではなく、意固地な態度を取り続けていた。

このようにして、私は兄の死を迎えた。従って、前々日の夜に見た兄の姿が、私にとって最後の兄の姿になってしまった。前日の朝のことは憶えていない。寝坊の私には、朝、病床の兄をわざわざ見舞う余裕などなかったのだろう。

兄はその冬、風邪で二週間ほど寝たり起きたりの生活を続けていた。微熱がなかなかとれないという程度の症状で、外に出て遊ぶことのできない毎日に退屈しきっていた。私が休みの日であるのに、それがうれしくて私から離れようとせず、私の寢床にまで潜りこみ、母に叱られてもなかなか自分の部屋に戻りたがらなかった。私も部屋で真面目に勉強をしているわけではなかった。兄が私の部屋にいてくれる方が心楽しく、ちょうどその頃、写真に凝っていたということもあって、寝巻姿の兄の写真を撮ったり、英語を教えてみたり、絵を描いて見せたりしていた。のんびりと母子だけの家族で過ごしていた毎日だった。学校にも行かず、勉強もせずにすんでいる兄を、私は心中うらやましいとさえ思っていた。だから、この程度のことはかまわないだろう、と弁解しながら、その兄のいちばんの宝物だった、青いガラス玉がたくさんちりばめてあるブローチを、ある日、盗み出した。兄がどこからか拾ってきたもので、それを兄は大事にしまひこみ、誰にも見せようとはしなかった。見せて、見せて、と何度、頼みこんでも、首を横に振り続けた。じゃあ、いいわよ、とこちらは諦めた振りをしたが、兄の思いがけない拒否に腹を立て続けていた。このわたしには今まで、いやだと言ったことのない子なのに、と。

どうせ取るに足りないガラクタに違いない。兄の宝物を軽蔑し、知恵が足りないから、やっばりそんなものを大切なものに考えてしまうのだ、と思ってみても、そのガラクタを見届けることのできないのが無性に腹立たしく、知恵が足りなくせに自分だけの宝物を作るなんて、と口惜しくなった。

それである日、思いきってそのブローチを盗みだしてみた。自分の部屋にどきどきして閉じこもり、仔細に調べた。予想通り、安っぽい、こわれかけた玩具のようなブローチだった。ガラス玉の幾つかが欠け落ちていて、玩具としても見劣りのする代物だった。その程度のものを大事に考えてしまう兄が情けなくなつた。遂に見届けてやつた、という満足感などなく、兄の大事なものをそつと守つてやることもできない自分の愚かさに気づかされていた。三歳年上の兄と同じ世界で物を見、音を聞き、泣いたり怒つたりできる子どもの日々がいつか終わるとは、想像もしていなかったことなのに、いつの間にか、私は兄と同じ眼で、安物のこわれかけたブローチの美しさに見とれることができなくなつていた。

ブローチを見つめながら、私はうろたえていた。見届けて、すぐに元の場所に返すつもりでいたのが、それができなくなつた。こんなつまらないもの、どうなつたつて知らない、と乱暴な気持ちになつて、私はそれを窓から庭に投げ捨ててしまった。投げ捨てずにいられなかつた。ブローチがなくなつていることに兄が気づいても、庭に落ちているのをすぐに見つけることはできるのだし、誰がそんなところに捨てたか、と兄が疑い、私を恨むようになれば、あんなものよりもつと美しい、ちゃんとしたブローチを買つてやつてもいい。

兄の秘密を踏みにじつてしまった自分に気が咎めながら、私はそう思い決めていた。しばらくの間、兄の様子を注意して見ていた。どうやら、なにも気づいてはいないようで、庭のブローチも発見されずにいるようだった。数日経つと、私はもうそのことを忘れかけていた。

兄が突然に死んで、真先に気がかりになったのが、このブローチのことだった。兄に対して取り返しのつかないことをしてしまった、と激しい後悔に身がすくんだ。そして、兄がブローチの紛失に本当に気づかぬままでいたのか、知りたいとも思った。母に聞けば、無論、簡単に分かることだった。が、今更、母に聞く勇氣もなかった。どちらにしても、安心を得られそうにはなかった。

兄の性的な成長にも戸惑わされていた日々だった。私の膨みかけた乳房に、兄は触れることが好きで、私も決していやな気持はせず、兄にだけは羞恥心もなく胸を見せていたが、母に知られれば怒られることなのだろう、という常識も私にはあり、不安を感じ続けていた。私が中学生になった時から、兄と共に入浴することは禁止された。母に禁止された時には、仲間はズレにされたような、ほっと安心するような気分を味わったのだったが、確かに十五歳と十二歳に育っていた兄と妹は、その頃から明らかに別々の道を歩みはじめていたのだろう。

それにしても兄は今ぐらいの年齢で死んで、かえって良かったのかもしれない、と兄の死の直後、考えてもいた。そうして、そんなことを考えた自分を薄情だと思い、怯えた。実際、安堵の思いが私の胸のなかに多少はあったのだ。

兄が死んで半年後に、私は初潮を迎えた。

その後、兄を失って成長続けた私はひとつの光景を後生大事に、記憶に留め続けていた。入院前夜の兄の様子で、それが私にとっては、この世で見届けた兄の最後の姿でもあるので、万が